

古代山城と地域社会－備中鬼ノ城を中心として－

亀田 修一（岡山理科大学）

備中鬼ノ城（きのじょう）は、岡山県総社市奥坂に所在する鬼城山（きのじょうざん：標高396.6m）に位置する城周2790mの土城です。この山城に関する古代の記録はなく、いわゆる神籠石（こうごいし）系山城です。古代の「備中国賀夜（かや）郡」に属し、鬼城山の南東麓に「東阿曾・西阿曾」という地名が残っていることから、この付近が「阿曾郷（阿蘇郷・阿宗郷）」に比定され、備中鬼ノ城は「阿曾郷」に含まれていた可能性があります。

備中鬼ノ城は、いつ、だれが、どのように、築いたか

備中鬼ノ城は、いつ、だれが、どのように築いたのでしょうか。亀田は、発注者はヤマト王権で、663年の白村江の戦いにおける敗戦を契機として、667年に対馬金田城、讃岐屋嶋城、河内・大和国境に高安城が築かれますが、備中鬼ノ城もこの頃に築かれたと考えています。朝鮮半島から大和までの陸・海の交通の要衝にある「吉備」のこの場所に、王都防衛のための山城を築こうとして、この地が選ばれたと考えています。

備中鬼ノ城の場所を選んだ人物は、少なくともこのような山城を使つての防御体制を理解している人物と考えられます。当時、このような山城の配置を考え、防御網を描くことができた人物は、百済滅亡前後に日本列島に渡って来た将軍・貴族たち、またはそれ以前に日本列島に来ていた渡来系の人物、その子孫たちであったと考えています。

具体的には、『日本書紀』天智天皇4年（665）条にありますように、百済から亡命してきた将軍・貴族クラスの人物がこの地に来て、指導して、選地・縄張などを行ったのではないかと考えています。実際の工事に関しましては、この地のいろいろな陸路・海路などの交通網、土地の様子を知る人物がいないと、作業は簡単に進まなかったと思われるので、将軍たちの補佐クラスの人物と地元の手伝うことができる人物が必要であったと考えています。地元の有力者（豪族層）が自ら築城に関与することも可能ですが、その人物が知識や技術を有する地元の渡来系の人物を推薦した可能性を考えています。

このような人物が実際の備中鬼ノ城築城の具体的なプランナーや現場監督などになり、実際の築城に必要ないろいろな技術者、工事に必要な土・石・木などの素材、実際の作業を行う人々をどのように集めるのかなどの仕事を行ったのではないかと考えています。百済から亡命してきた人々の中のこのような知識や技術を持った工兵部隊の責任者クラスの人物、工兵部隊のような仕事をしていた人々などが、地元のそのような作業を行うことができる指導者・技術者（おもに渡来系の人々、そして一部倭人）や実際の作業をする人々（おもに在地の倭人たち）を集め、指導しながら築城していったのではないのでしょうか。

この備中鬼ノ城の築かれた地域には、「備中国大税負死亡人帳」（天平11年：739）というものが『正倉院文書』のなかに残されています。「賀夜郡阿蘇郷」の人物名も記録されています。想定されている備中鬼ノ城廃城時期より少し後の記録ですが、このなかに記された人々の親兄弟のなかには備中鬼ノ城の築城や修繕に参加した人物もいたかもしれません。

そしてこのなかには渡来系の人々の名前があり、ヤマト王権中枢部にいた蘇我稲目・馬子（そがのいなめ・うまこ）親子が関与した白猪屯倉・児島屯倉（しらいのみやけ・こじまのみやけ）との関わりを推測させる地名もあります。この白猪屯倉に関しましては、百済系渡来人である王辰爾（おうしんに）の甥、胆津（いつ）による田部の丁籍（たべのよぼろのふみた）の検定という記録があります。この田部の丁籍の検定という作業は実際に築城に関わる人々を動員するときに大いに役立ったのではないかと考えています。



図9 備中南東部地域の朝鮮半島関係遺跡

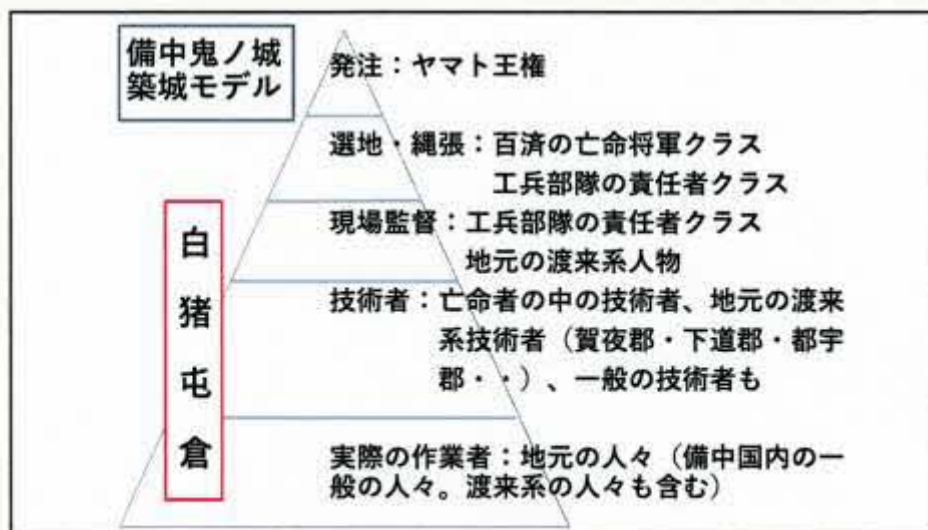


図10 備中鬼ノ城築城に関わった人々